# 走ることしか考えていないスズカのおはなし。

サイレンススズカ専属トレーナー

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※注意※

この小説は、『走ることしか考えていないサイレンススズカと効率的に勝つ方法を考えるタイプのトレーナー。あと割と理解のある友人一同。』のＢＡＤ　ＥＮＤを投げる小説になります。

必ず本編をご覧の上、曇らせ、死ネタ等十分な耐性をお持ちの方だけ閲覧していただけると幸いです。

また、当然ながらこちらの小説の展開、設定等の一切は本編には関係しません。

# 目次


サイレンススズカIF1 ―― 1
サイレンススズカIF2 ―― 16
サイレンススズカIF3 ―― 28
サイレンススズカIF4 ―― 62

# サイレンススズカIF1

「……スズカ。迎えに来たぞ」
「エアグルーヴ。よくここが解ったわね」

かつて、私はサイレンススズカというウマ娘に憧れていた。

誰よりも自由で、楽しそうに走る姿に。それでいて腹立たしいほどに私より速く、強かった。どれだけ鍛えても、ついぞ私は奴に一度も勝てていない。女帝だと自他ともに称していても、逃亡者一人捕まえることが出来なかった。

彼女は私の憧れだ。私も一人のウマ娘で、決して頂点ではない。ある意味では幸運なくらいに高く立ち塞がる、終生のライバルだと、私はそう思っていた。

「たわけ。お前がここ以外にいた試しががあったか？」
「……そうだったかしら……？　そうかも……」

とぼけた態度と、内に秘める闘志。誰より強い彼女に、きっと私は惹かれていたんだろうと思う。

Ｂａｄ√１　『あなたをわすれないために』

チーム・エルナトの……スズカのトレーナーが死んだのは、二年前の春のことだった。スズカのシニアはこれからで、クラシック後期で見せた圧倒的な強さをまた見られるのだと、それに立ち向かうのだと私も覚悟を決めていた頃だった。

奴はあっけなく、事故で死んだ。誰が悪かったわけでもない。強いて言えば関わった人間、全員が悪かったのだろう。理事長経由でスズカに警察の見解を伝えたのは私だ。取り立てて彼女に責は無い。だが、相手方にも無い。単純に不幸だったとしか言いよう

がなかった。

それを聞いた時のスズカは、私が思ったより取り乱していなかった、ような気がした。もちろん、スズカはいつだって何を考えているか解らないほどに能天気で、マイペースだった。その時も、どれだけ悲しんでいたのかは想像もできない。

だが、言いようもない不気味さを、どこか不安定な驚愕を感じたのもまた事実だった。

「いつもお前はここにいる。だから私もここに来たんだ」

「ああ……退去の話？」

「……そうだ。ここはもう、エルナトの部屋ではなくなる」

それからも、スズカは何も変わらなかった。一つも、まったく。後輩であるミホノブルボンとともに別のトレーナーに引き取られた後も、ただ淡々と練習メニューをこなしていたように見えた。

いつしかスズカが練習に来なくなったという知らせがあってもレースには出たし、そこではいつものサイレンススズカだった。ただ、ストッパーがいなくなったスズカのラ

ンニング癖は悪化したように思える。

そして、そのうちに……友人だと言っていた私も、ミホノブルボンも何もしないまま、気が付けばスズカはこの部屋に入り浸るようになっていた。誰もいない、誰も来ないこの部屋で、ぼーっとしていることが増えた。

「そう……じゃあ出ていかないとね」

「……違うだろうスズカ。出ていく必要は無い。私が何を言いたいか、解っているだろう。お前にどうして欲しいのか……私にここまで言わせて、解らないとは言わせんぞ」

「……エアグルーヴ」

ここは、もう彼女の部屋ではない。だが、彼女は最強の交渉カードを持っていた。エルナトのトレーナーが死んでもなお、出走するＧ１レースは例外無く勝った。トレセン学園は実力主義だ。圧倒的強者であるスズカが、この部屋を使いたいと言えば、同情も込みで間違いなくこれからもここにいることはできる。それがスズカにとって救いとなるかは解らないが。

だから、スズカは一言言えば良い。私だって、スズカを本当に退去させるために来たわけじゃない。

『引退は撤回する』、そう一言言えばすべては終わる話なのだ。

「どうしてだスズカ。まだお前は走れるだろう。力は衰えていない。お前ならドリームリーグに進めるはずだ」

「ああ……たづなさんも言ってたわ。ぜひ考えてくれって」

「だったら……」

「でも、決めちゃったから。トレーナーさんもよく言ってたわ。私は頑固なの」

今年の頭、サイレンススズカは突然に引退を表明した。怪我でもない。成績低迷もない。どのリーグに所属しても、スズカは求められている。トゥインクルで連覇しても、ドリームリーグに殴り込んでも良い。海外のレースに出たって良いはずだ。

だが、彼女は個人的な理由だと言葉を切って、二度とメディアの前には出なかった。

生徒会で行った面談でも、全く同じセリフを吐いた。

「決めただと……納得できるはずがない、お前は凄いウマ娘だ。走らなければならない。それに、やめるなら二年前でも良かったんじゃないか！」

「それは……まあ、そうだけど」

スズカはいつも、ソファに寝転がるように座っている。こうして話していると、スズカの話し方は何も変わらない。ずっと同じ調子で、どこか上の空に話す姿は出会った頃から何も変わらない。

「戻ってこい、スズカ。迎えに来た。ここはお前の居場所じゃないんだ。お前のトレーナーは、もう、帰ってこない」

一言ずつ、胸が痛む。しかし、これは私の使命だ。放ってはおけない、友人として、友人を、捨ててはおけない。

だが、私と対照的に、スズカは極めて普段通りに徹した。

「うん……それは解ってるわ。私、ちゃんと見たもの。トレーナーさんの最後の顔も、残った骨も」
「……すまん」
「ううん、気にしないで。私も……えっと、色々内緒にしちゃったから。そんなつもりじゃなかったの。ブルボンちゃんには解ってもらえたから、良いかなって」
「……私ではダメだったか」
「だってエアグルーヴは止めてくれるでしょう？　私に走れと言うでしょう」
「……ああ」

その通り、スズカにはずっと走っていてほしい。私が走れるうちは越えるべき壁として、走れなくなっても輝く星として。私のエゴでもあるし、日本で一番求められていることだ。どこまでスズカが逃げられるのか見てみたい。勝ち逃げなど許さない。スズカの有終は敗北によって完成すると、そう言っているものすらいる。

「でもね……もう、全部走っちゃったから。大阪杯も、宝塚も、天皇賞も、マイルチャンピオンシップも……トレーナーさんが走れると言ったレースはもう残ってないから、もう良いわ」

「……ドリームリーグだってある」
「トレーナーさんはたぶん走らせてくれないわ。負けちゃうかもしれないから。あの人は私が負けたら悲しむと思うの。だからこれでおしまいにするわ」
「違う……違うだろうスズカ……それじゃあトレーナーに縛られているだけだ……！」
「懐かしいわね。確かここでも何回か縛られたわ。くすぐったいのよね」

スズカとの会話がどこかに消えていく。ダメだ。ここでスズカを行かせてはいけない。万が一、億が一でもスズカが血迷うことがあれば。大切な友人に、そんなことをしてほしくない。
気付けば私はスズカに詰め寄って、肩を掴んでいた。

「どうしてだ、どうして走るのをやめてしまうんだ……！　あんなに走るのが好きだと、言っていたじゃないか……！　それとも、レースではなかったのか!?　私達では不足だったのか!?　スズカ！」
「エア――」
「走らないなどと言わないでくれ……！　私と、もっと走ってくれ！　もっとお前のことを見せてくれ！　頼む……！」

「違うわエアグルーヴ。みんなのせいじゃないの。これは私のせいなの」
「……は？」

スズカの落ち着き払った態度は変わらない、ずっと、一本調子だ。ずっと変わらないまま、うーんと、とスズカは呑気に考える声を発した。

「走るのは今も好きだし、走りたいし、レースも出たい。それはそう。嫌いになんてなれないわ」
「だったら……」
「でも、その……トレーナーさんのためにも、もう走っちゃダメって思ったの」
「……どういうことだ」

確かに、スズカのトレーナーはスズカが走ることを良しとしていなかった。何度もその攻防は見ることになったし、記憶にも新しい。
だが、彼女自身は、きっとスズカが走ることを望んでいたはずだ。

「お前のトレーナーが、お前が走らないことを望んでいるとでも思っているのか？」

「そうじゃないけど……でもエアグルーヴ、死んでしまった人を忘れないでいてあげるのは、必要なことじゃない？」
「それは……そうだが」

だが、スズカが彼女のことを忘れるわけがない。あれだけ関わっておいて、今更いなくなって。
スズカに促され、向かいに座る。いや、スズカはどこかおかしくなっている……いくらなんでも私と対面して話すのに転がったままでいることなどなかったはずだ。

「じゃあ走っちゃダメでしょ？　走れないんだったらトレセンにいても仕方無いから」
「覚えておくのと走らないのと何の関係があるんだ」
「うーん……まあ、エアグルーヴにも話しておくわね。ブルボンちゃんにも言ったんだけど」
「どうしたんだ」
「私ね……走るの大好きなの」

知っている。

「今更だな」
「うん。走るのは楽しくて、気持ち良くて、できることならずっと走っていたいの。それでね。走るときはこう、一人で、誰もいない中を流れていって、自由で……そうじゃなきゃいけないと思うわ」
「……そうか」

やはり変わっていないのか……？　走ることになると口数が増えるのもサイレンススズカじゃないか。口元を少し緩めて話す姿に少し安心する。少なくとも走ることを嫌悪しているわけではない。とにかくそれだけでも十分だ。
つまりそれは、まだ説得の余地があるということだから。

そう、思っていた。

「でもね。それっておかしいの、エアグルーヴ」

しかし、私は甘かった。

「私は走っていると一人でしょう？　でも、私はトレーナーさんのことを忘れちゃダメなの。じゃあもう走っちゃダメじゃない？」
「……何を言ってるんだ」

「走るとね、嫌なことは全部忘れられちゃう。悩んでても辛くても、気持ち良く走れたらそれだけで、どうでもいいかなって思えちゃうの」
「不思議よね、エアグルーヴ。私はとても辛いわ。今にも死んでしまいたいくらい苦しいの。でも、それだってトレーナーさんのことを覚えているために必要なことなの」
「だって、走ったら全部飛んでいってしまうのよ。こんなに悲しい気持ちも、辛い気持ちも、全部無くなっちゃう。そんな酷いことはないじゃない」

「……スズカ」

「それにね」

まだ、スズカは止まらない。

「ほんのちょっとでも、たった一瞬でも。『こんなに気持ち良く走れるなんて』」

スズカは止まれない。

『トレーナーさんがいなくなって良かった』なんて思ってしまったら。いったい私達の時間は何だったの？」

止まったら。ありのままにいたら死んでしまう生き物だ。

「ス、ズカ……」

「大丈夫よ。我慢には慣れたから。何度もトレーナーさんと練習したもの。きっとこれからも大丈夫」

「いや……それは……そうではない……だろう……」

私は何を言うべきなんだ。何を言ったらスズカは踏み留まってくれる？　何を言えば、スズカにこんな諦めた顔をさせずに済むんだ？

「そうなのよ」
「しかし――」
「本当は、こんなことすぐに気付いてたの。最初に走った時点で、解っていたの」
「……だったらなぜ」
「トレーナーさんはね、私が勝てるレースは何でも出て良いって言ったわ。もちろん、私は何でも良いから任せてたけど……でも、ちゃんとお話は聞いてたから。これと、これと、このレースが候補だって。それが無くなるまでは走ろうかなって」
「まだ……まだだぞスズカ。一度勝って終わりじゃない」
「私にとっては終わりで良いのよ。勝ったから。だからこれでおしまい。トレーナーさんの言うことはちゃんと聞かないといけないから。ちゃんとできたってトレーナーさんに言いに行くの」
「……！　おい、まさか貴様死――」
「自分で死んだりしないわ。そんなことしたら同じところに行けないでしょ？　ちゃんと同じところに行って、これまで走ってきたお仕置きをたくさんしてもらって、それで、その後いっぱい褒めてもらうの」

それじゃあ退去するわね、とスズカが立ち上がる。私なんていないかのように、出口に向かって歩いていく。止めなければならない。だが、言葉が出てこない。

「じゃあね、エアグルーヴ。また今度」

扉が閉まった。

そして私は二度と、サイレンススズカと会うことはなかった。

# サイレンススズカＩＦ２

スズカへ。

この手紙を読んでいるということは、私はもうスズカの側にはいないのだと思います。

ごめん、こういうこと書いてみたかっただけ。置き手紙だから当然だね。

私からスズカへ、謝らなければいけないことがあります。直接言うときっとスズカは聞いてくれないと思うので、手紙で許してください。

そうそう、忘れてはいけないので初めに書いておきます。机に置いた通帳には、たぶんこれまでスズカの賞金から配分されたお金と同じくらいのお金が入っていると思います。返しますから、スズカのために使ってください。

それでは、本題です。

まずは、スズカに黙っていなくなってしまってごめんなさい。

Ｂａｄ√２　『わたしをわすれて』

私がスズカから離れなければいけない理由が、二つあります。

一つは、スズカがトレセン学園を卒業したから。

私は、スズカの後も誰かを担当しなくてはいけません。それは私の知る誰かかもしれないし、知らない誰かかもしれません。でも、私はお仕事でトレセン学園にいるから、何かしなければいけません。

でも、しばらく考えて、これ以上誰かを担当することはできないと思いました。

スズカはどう思っているか解らないけど、私は、スズカが勝てたのはスズカの実力あってこそだと思っています。私の力なんてそこには入っていなくて、いてもいなくても同じ。

もし私のおかげで何かがあったとして、それは精々、スズカが故障せずに走りきれたことくらいだと思います。

私には、ウマ娘を導く力なんてありません。

内緒にするつもりだったんだけど、スズカにだけは本当のことを言っておきます。私には、ウマ娘の能力が見えるという不思議な力があります。

でも、だからこそ、私はウマ娘をどこかキャラクターのように見ていたんじゃないかとも思います。スズカのこともそうだよ。

私はきっと、これからもトレセンに期待され続けるんだと思います。初めのうちは良いでしょう。スズカや、ブルボンや、他のみんなみたいに、私が何もしなくたってうま

くいっていたような強い子を見つけられるかもしれません。

でも、それはきっと長くは続きません。そのうち私では、きっとやりようがなくなります。

そうしたら、きっとみんな私を責めるでしょう。責めなくとも、私が育てるのに失敗したウマ娘の人生はどうなるでしょう。

これもスズカには言っていませんでしたね。私は、ウマ娘に情熱を燃やしたことはありません。不思議な力があって、それが活かせそうだから軽い気持ちでトレセンに来ています。

普通に退職することはできません。スズカにはこんなこと知って欲しくないけど、トレセンはトレーナーに少し冷たいところがあります。私みたいに有能だと思われているトレーナーは、辞めさせてもらえません。だから逃げることにしました。

どこまでも自分勝手な私を許してください。どれだけ考えても無理でした。私に救いを求める手を振り払うのも、信頼を裏切ることも、そんなことが毎年あるなんて耐えられません。自分のためにスズカを裏切ってごめんなさい。

二つ目は、スズカが引退するからです。

一つ目と同じになっちゃいました。でも、一つ目よりもっと気持ちの悪いことを言ってしまうかもしれません。

私は、スズカのことが好きでした。いつからかは解らないけど、あなたに、年齢も性別も立場もおかしな気持ちを抱いていました。気持ち悪いですよね。読むに堪えなかったらすぐに手紙を破り捨ててください。

でも、本当に好きなのです。好きです。スズカが好きです。ごめんなさい。スズカのことを好きになってしまって本当にごめんなさい。

スズカはきっと、これから誰かパートナーを見つけて、子供を作るんだと思います。スズカほどのウマ娘ならみんながそれを求めると思うし、それを止める権利は私にはありません。

そうなったら私はたぶん耐えられないと思います。私のスズカでいてほしい。サイレンススズカを誰にも盗られたくないと思ってしまいました。ごめんなさい。また気持ちの悪いことを言いました。ごめんなさい。

でも、本当に嫌なんです。スズカが他の誰かの一番になることが、どうしても嫌だったんです。きっと旦那さんができても、スズカは私とかかわるでしょう。私は生きている限りずっと、私のものではないスズカと、私からスズカをうばった誰かを見続けなければなりません。

それに、スズカのことがすきな私が、結婚したスズカと関わることはできません。それはきっと許されないことだとおもいます。

いっそスズカを連れて逃げてしまおうかと思いました。でも、それはいけないことです。それに、スズカの自由をまたうばうことになります。それに、そんなことをしたらわたしはスズカにこの気持ちを言わないといけなく

だから、そんな思いをする前に、私はスズカの前からいなくなろうと思います。どこかとおくで、スズカのことを思いながら、スズカと関わらずに生きていきます。だから、好きでいることだけはゆるしてください。二度とスズカの前にあらわれません。

長くなりましたが、最後に。

スズカ、卒業おめでとう。ラストランも、卒業ライブも、ちゃんと見ました。アンコールは時間的に見られなかったけど、とっても良かったです。ほれなおしました。ごめんなさい。

スズカを捨てて消える私は、もうスズカのトレーナーではないと思います。わたしはずっとそう思っていたいけど、スズカも、みんなも、そうは思わないでしょう。

でも、まだ学園にいるスズカへ。スズカのおかしなトレーナーから、最後の指示です。

わたしのことは、わすれてください。

スズカはやさしいから、わたしのことを忘れずに生きていこうとすると思います。でも、そんなことをしてもなんにもなりません。私みたいなゴミのことを覚えていても、スズカはしあわせにはなれません。

スズカはだれかあなたのことを一番に思ってくれる人とけっこんして、しあわせになってほしいです。こんなおかしなやつに好かれていたなんて、忘れたほうが幸せです。

そして、最後のお願いです。

体に気をつけて、長生きしてください。こんな勝手なわたしだけど、元気なスズカの姿や、スズカの娘が走る姿を見るのはゆるしてください。

自由に走るスズカを祈っています。さようなら。

あなたのことが大好きなあなたのトレーナーより

24　サイレンススズカＩＦ２

これを読んだ人へ。

トレーナーさんを探しに行きます。

何かの拍子に連れ戻されても困るので、スマホは置いていきます。いつになるかは解

りませんが、トレーナーさんに会えたら帰ります。それまで探さないでください。

もし私がどこかで倒れていたら、叩き起こしてください。トレーナーさんが戻ってきたら、私が探していると伝えてください。机の上の通帳は私の賞金の全部です。お父さんとお母さんに渡してください。

トレーナーさんのことが大好きなサイレンススズカより。

# サイレンススズカＩＦ３

　それは、突然のことでした。いつも通りトレーニングを終えて、いつも通り食堂の誘惑に負けずに寮へ帰って、それから、珍しく夕方から眠っているスズカさんの、乱れた布団をかけ直してあげようとして。

「……スペちゃん？」
「あ、おはようございます、スズカさん。珍しいですね、こんな時間に寝てるなんて」
「あれ？　私、いつの間に……あ、え？」
「どうかしました？」

　それは、私の大切な先輩が、どこかへ消えてしまう、そんな事件の一日目。目覚めたスズカさんが、自分の脚を見つめて発した一言から、始まってしまいました。

「スペちゃん、私のギプス、どこ？」

Ｂａｄ√３　『あなたをさがして』

「ギプス？」

ぺたぺたと自分の脚に触れるスズカさん。ギプスって、あれですよね。骨折とかした時に使うやつ。

「スズカさん、ギプス着けてたんですか？」
「え……着けてたじゃない。脚に……あれ、全然痛くない……？」
「着けてないですよ？」

そもそも怪我をしていないスズカさんがそんなものを着ける必要はないし、着けていたら真っ先に私が気付く。毎日同じ部屋で寝ているのだし隠せるわけがない。寝惚け

てるのかな。

だけど、スズカさんは心底不思議そうな顔をしながら、頭を抱えて首を捻った。

「あれ……確かに私、怪我をして、ギプスを着けていたはず……なのだけど」

「夢でも見たんじゃないですか？　ちょっと、不吉ですけど……」

ギプスが必要になるような怪我なんて、考えただけでも恐ろしい。幸い私とスズカさんにはその経験はないけど、グラスちゃんとかは長期休養もしていたみたいだし、たとえ夢でも怖くなります。

「ゆ、夢……？　怪我が……？　ごめんスペちゃん、い、今何時？」

六時です、と時計をありのままに伝えると、スズカさんは立ち上がって部屋着から制服に着替え始めました。おっとっと。一応鍵をかけないと。スズカさんは無頓着で困ります。

「どこかに行くんですか？」

「トレーナーさんの所に行ってくるわね」
「え？　もうトレーナーさん決まったんですか!?」

スズカさんがあまりにも当然のように言うので驚いて大きな声を出してしまいました。スズカさん、即決にも程がありませんか。いや、元々あんまり気にしなさそうな人だとは思ってましたけど。

スズカさんが最初の、つまり一人目のトレーナーさんと契約を解除したのが去年の暮れ。まだ新年始まってすぐです。スピード感が……というか、私には言ってくれても良かったのに。

「決まっ……？　え？　ん？　ごめんなさい、どういう質問……？」
「え、だから、新しいトレーナーさん、決まったってことですか……あ、前のトレーナーさんの引き継ぎとか？」
「前の……？　ど、え……？」

何か、混乱しているようなスズカさん。

「あの、え、私、別にトレーナーさんを変えたりはしてないわ。一昨年の話でしょう……？」
「え？　一昨年にも変えてたんですか？　てっきり入学から同じ人なんだと思ってました」
「え、あの、え？　スペちゃん、何を言ってるの……？」

前のトレーナーさんが一人目だって、スズカさんから聞いたような気がするんですけど。一昨年ってことは、クラシックのどこかでってことでしょうか。前半は私も物静かでおしゃべりは好きじゃないのかな、なんて遠慮していたので、もしかしたら私が知らなかっただけ？

「と、トレーナーさんよ？　私の。スペちゃんも知ってるでしょ？　何回も会ってる人……」
「え？　私も知ってる人ですか？　誰だろう……あんまりトレーナーさん達のことは詳しくないんですけど……」

知っているトレーナーさんの顔を思い浮かべます。でも、基本的には初めにちょろっ

と調べたチームの人達と、同期の……グラスちゃん達のトレーナーさんくらいしか解りません。私はトレーナーさんを変えてませんし、あまり他の方との関わりも無いし……

と、スズカさんが私の額に手を当てて来ました。

「スペちゃん、大丈夫？　熱は無いけど……」

「いや、け、健康ですけど……」

「私のトレーナーさん、え、し、知らないの？」

そう言ってスズカさんが挙げた名前……は、全く聞き覚えがありません。女性の方でしょうか？　なおさら一人も知りません。トレセンのトレーナーさんは男性の方が多いですし、私も女として一応同性の方が楽だと思って調べはしたんですけど。

知らないです、と言うと、スズカさんは目を見開いて再びベッドに戻っていきました。

「どういうこと……？　何……」

「……？」

やはり寝惚けてしまっているんでしょうか。最近……いえ、やっぱりずっと、スズカ

さんはあの走り方がストレスだったんでしょう。王道の先行差し、私から見てもあんまり合っているようには思えませんでした。それとなく伝えたこともあります。

スズカさんはたまに走ると解りますが、たぶんスピードはかなりのものがあると思うんです。それなのにまだデビューとオープンの二勝だけに留まっているのは、そういうことなんじゃないかって。

だからトレーナーさんと去年の暮れでお別れしたって聞いたんですが……まさか、ボケちゃったとか……!?

「……あの、スペちゃん。ちょっと聞きたいんだけど」
「はい？」
「チーム・エルナトは覚えてる？　私と、ブルボンさんと……」
「エルナト……？　そんなチームありましたっけ？」

チーム名も解らないし、ブルボンさん……というのは？　私達にとっての『ブルボン』はやっぱり、いくつも上の先輩、ミホノブルボンさんのことです。無敗の三冠を期待されつつも惜しくも逃し、そのまま悔やまれつつ引退してしまった人。今、何してるんで

しょう。

「え……え？　何、どういうこと？　スペちゃん、私のことからかってる……？」
「え？　いえ、そんなことしないですけど……」
「だって、私のトレーナーさん、え……？」

額を押さえつつ左回りを始めてしまいました。そろそろ目が覚めてきたでしょうか？　スズカさん、ちょっと天然なところがあるからなあ。ふわふわした人だけど、たまによく解らないことを言うから。

「……あの、スペちゃん。今日は一月十日よね？　スペちゃんは今年シニア一年目、私は二年目……で、合ってる？」
「合ってますよ」
「エイプリルフールじゃ、ないのよね？」
「違います」
「スペちゃんがこんな嘘言うはずないし……ううん……どういうこと？　どうしてトレーナーさん……あ、写真、電話……」

スズカさんは携帯を取り出し、何か探し始めました。いや、夢なんですから何も無いと思います。これは重症……ですかね。寝不足とストレスでスズカさんがおかしくなってしまいました。

「あ、あれ？　あれ？　なんで？　無い、無い……！　どうして……!?」

しばらく、非常に焦った様子で携帯を弄っていましたが、少しして、

「スペちゃんにも教えていたはず……スペちゃん、携帯見せて！」

「良いですけど……」

保健室？　病院？　こういう時ってどうすれば良いんでしょう。というか、何故か少し落ち着いている私は何なんでしょう。どうしてか、あんまり焦る気持ちが沸いてきません。

「無い、な、ん……あ、え……トレーナーさん……？」

あまりにも、スズカさんが真剣な顔をしているから、でしょうか？

---

「いや……すまない。まったく覚えが無い」
「どうして……？」

ふらつくスズカさんは、それでもどこかへ行こうとしていました。明らかにおかしな様子で校舎を進むスズカさんを追いかけて、私も学園まで来てしまいました。
道すがら会う知り合いみんなに同じことを尋ねて、そして、最終的に生徒会の仕事で遅くまで残っていたらしいエアグルーヴ副会長にも聞いて……そして、ついに壁に凭れ掛かるようにへたりこんでしまいました。

「スズカ!?　大丈夫か！」

「エア……グルーヴ……スペちゃん……おかしい……おかしいわ……」
「スズカさん！」

普段、大抵のことは困ったように笑うだけで終わらせるスズカさんが、心底絶望したように、頭を抱えてしまった。うわ言みたいに私達の名前を呼んで、荒く呼吸を繰り返す。

「トレーナーさん……私のトレーナーさんはどこ……？」
「いや……待て、解った。スズカ。たづなさんの所に行こう。トレーナー名簿があるはずだ」
「……副会長さん？」

肩を貸し、スズカさんを二人で立ち上がらせます。副会長さんに聞くと、目を細めて小さく呟きました。

「それは夢だと言うのは簡単だ。だが流石に真に迫り過ぎている。それに、スズカは抜けている奴だが人を困らせるほど夢の話を推したりはしない。まだ少し、断ずるには速

い……気がする」

もちろん、私も全く覚えが無いし、訳が解らないが、と副会長は言った。私も、それは少し解る。スズカさんは穏やかで、いつも誰かに引っ張られて、自己主張の少ない人だ。だからこそ、合わない走り方でも従っていたし、しばらくそれに甘んじていた。

もしもっと強かったならばトレーナーさんとぶつかってでも解決を図っただろうし、もう少し忍耐強くなければ密かに逃げていただろうし。

「トレーナーさん……」

静かに呟くスズカさんからは、弱さというより執念じみた何かを感じないでもないけれど。

スズカさんを連れてたづなさんを探す。トレセン中を動いている彼女を探すのは結構難しかったけど、そのぶん目撃情報も多い。ちゃんと見つかって、変わらず息を切らしているスズカさんが彼女に詰め寄る。

「た、たづなさんっ」

「は、はい？　サイレンススズカさん」
「トレーナーさん、を……私のトレーナーさんがいないんです……！」
「え？」
「たづなさん。突然申し訳ありません。トレーナー名簿を見せていただきたく」
「はあ……もちろん、すぐにお見せします。とりあえず、こちらでも中距離やマイルの育成ができる方をリストアップしていますので、スズカさん用に……」
「違います……！　全員です……！」
「え？」

　たづなさんもどうやら、スズカさんのことを気にかけていてくれたらしい。戸惑いからすぐにいつもの笑顔に戻って、荷物も無いのにどこかからファイルを取り出していた。それを、柄にもなくスズカさんは掴んで止めた。

「トレセンにいるトレーナーさん全て、できれば辞めてしまった人や、就職予定の方まで、全員です！」

「いない……これも……！」
「……ダメだ。こっちにはいないな」
「こちらにもいませんね」

図書室にて。たづなさんも巻き込み、私達は大量のトレーナー名簿を並べて探していた。スズカさんはその「トレーナーさん」について、名前も誕生日も淀みなく話してくれた。夢の話にしては、住所まで細かく。
でも、私の担当する範囲にも、そんな女性はいない。

「私のところにもいないです」
「……っ、そんな……どうして……？　トレーナーさん……」

口元を押さえ、どこかあらぬところを見つめるスズカさん。いないものは仕方がありません。でも副会長の言う通り、スズカさんは夢の話で周りを困らせるような人ではないし、冗談なんてもっとしません。嘘もつけない人です。

本気で、心の底から、「トレーナーさん」がいると思っている。私も、たづなさんも、遅ればせながらそれに気が付きました。

……だったら、私も、何かしなければならない。大切な先輩のためです。

「スズカさ――」

「……行かなきゃ……」

スズカさんの知っている住所に行ってみましょう、と言う前に、スズカさんがふらふらと歩き出しました。私達には目もくれず、まっすぐに出ていこうとします。慌てて副会長が止めますが、気にも留めず進んでいきます。絶対に放ってはいけない、と、心のどこかに強烈に訴えてくるみたいに寂しそうで、私も咄嗟に走り出しました。

「スズカさん！　どこに行くんですか!?」

「……」

「スズカさん！」

「……行かなきゃ……」

「スズカ！　落ち着け！」

副会長がドン、と体を捻り、スズカさんを壁際に追い詰めました。様子がさらに、おかしくなっています。あのスズカさんが、副会長さんの胸に、やり返すみたいに手を当てました。

「……邪魔しないで」

「断る。何をしようとしているんだ」

「……トレーナーさんの家に行くの。迎えに行かなきゃ。こんなの変だもの。トレーナーさんはいるの。絶対にいる。私は覚えてる。みんながおかしいんだわ。トレーナーさんに会いに行かなきゃ」

「……ダメだ。どんな理由があろうと、本当に『トレーナーさん』がそこにいようと、今は一般人だろう。突然行ってどうする」

「……そんなことないわ。私に会えばトレーナーさんだって思い出してくれる。もう一度私を選んでくれる。絶対に」

淡々と言い放つスズカさん。初めて、スズカさんをこんなに怖いと思ってしまいまし

た。でも副会長は怯むことなく、腕を掴んで睨みつけます。キックができない以上、こうしてしまえば無理矢理抜け出すことはできません。

「放して」
「ダメだ。今のお前を行かせることはできない」
「……邪魔するならエアグルーヴでも許さないんだから。トレーナーさんに会いたいだけなの」
「……せめて私が行く。お前はトレセンで待っていろ。頼む」
「嫌」
「……スズカ」

針で刺すみたいな空気が流れ、しばらく二人とも黙ってしまいました。触れたらどちらかが叫びそうなくらいに、まっすぐ向き合っています。おかしいのは、スズカさんの、はずですけれど。でも、スズカさんの気が違ってでもいない限り、ここまでして強く出るなんてことをするとも思えません。確かめる価値は、あるのかも。

「これ以上やるなら生徒会から上に報告する。寮で謹慎するか？」

「……すればいいわ」
「外出は完全に禁止、スズカを病院に連れていく。逃げられると思うな。私が監視につく」
「……エアグルーヴが私に追いつけるはずないわ。トレーナーさんはそう言っていたもの。私が一番速いの」
「……やってみるか？　スズカ。私が勝ったら謹慎だ」
「私が勝ったら行っても良いの？　話してもムダならそれで決める？」
「……それは呑めない。今のスズカでは逮捕される可能性もある。責任をもって私が会いに行ってくるから、それで何とかならないか」
「私も行きます！　スズカさん、だから、少し休んでください！」

スズカさんが、副会長さんを挑発までしている。自分が勝つと本気で信じて疑っていない。こんなこと、今まで無かったのに。明らかに昨日までと違います。本当に、別の世界から来ているみたいに。まだ重賞の一つも勝っていないスズカさんから、私や副会長さんの押しのけるほどの気迫が発されています。

「……今日行って。それ以上は待たない。今からレースで決めるなら」

「……それで良い。距離はどうする」
「マイルか、中距離か。トレーナーさんはそれなら私が絶対に勝つと言ったわ。好きに決めて、エアグルーヴ」
「……２０００でやろう。スペシャルウィーク、スズカを見ていてくれ。コース申請を今から通してくる」
「は、はい！」

両手を完全に掴んだまま、スズカさんが引き渡されました。スズカさんは抵抗しません。やっぱり勝ちを確信しているようで。オープンウマ娘のスズカさんが、Ｇ１ウマ娘の副会長さんに。ウマ娘の強さは実績では計れません、が、それでも、誰しもが無謀な戦いだと解るはずです。
だというのに、スズカさんは何も言わず、トレーナーさん、トレーナーさん、と呟いて、私の誘導通りに着替えを済ませ、コースに出ていきました。

「……スズカさん、その」
「……スペちゃんは」

副会長さんを待っている間、スズカさんがぽつりと口を開きました。

「スペちゃんは、クラシックの成績はどうだったの？」

「え……えっと……重賞はきさらぎ賞と、ダービーを……」

「皐月賞と菊花賞はセイウンスカイさんに負けた……合ってる？」

「……はい」

それは、私がスズカさんに……いえ、スズカさんが直接見に来ていたはずです。慰めても貰いました。知っていて当然です。でも、今のスズカさんに言われると、もしかして、と。

「スズカさんの中では、私はダービーに勝てなかったんですか」

「いいえ……勝ったわ。エルコンドルパサーさんとの直線勝負で、トレーナーさんも褒めてた」

「エルちゃん……？」

エルちゃんは確か、ダービーには出なかったはず。ＮＨＫマイルカップに出たから休

むと、そう言って。彼女がダービーに出た？　そして、私が最後まで競っていた？　エルちゃんと？　ジャパンカップでは三バ身離されたのに？

「それは……私の記憶とは違います」

「そう……なの……そう……」

　そんなことがあるんでしょうか。スズカさんが別世界から来た、そんなことが。気をおかしくしてしまったのと、どちらが現実的なんでしょう。毎日思い悩んでいたのは知っています。でも、それだけでここまで？　自分のトレーナーさんを頭の中で作り出すほど、一晩で？　昨日までは、新しいトレーナーさんを決めないと、と憂鬱にため息をついていたのに。

「その、スズカさん」

「なに？」

「……スズカさんの中では、スズカさんは勝っていたんですか」

「……そうね。トレーナーさんがいるから。何度も勝ったと思う」

「でも、今はトレーナーさんはいません」

「勝ち方は覚えてる。それに、トレーナーさんは私を勝たせてくれたけど、トレーナーさんはいつも言っているもの。スズカが勝てるのはスズカが速いからで、私の力なんてほとんど無いって。そんなことないのに」

良いトレーナーさん、だったのかな。スズカさんの力を見抜いて、勝たせてあげた人。いるなら会ってみたい。でも、いない。トレセンにはそんな人はいない。違うところにいるのはスズカさんで、「トレーナーさん」がついてきているかは解らない。

「……待たせたな、スズカ」

「……エアグルーヴ」

副会長さんが来てしまい……しょ、勝負服……？　どうして、そんな……いえ、これは、それだけ本気ということで……。

「勝負服、私の知っているのと同じね。やっぱりトレーナーさんはあの人？　奥さんとエアグルーヴに頭の上がらない人」

「……御託は良い。始めるぞ。スズカ。約束は守れ」

「もちろん。負けたらトレーナーさんは諦めても良いわ」

でも、とスズカさんは微笑みます。目に光が、炎が灯ったように、副会長さんに向きます。

「絶対に私が勝つ。エアグルーヴには負けない。トレーナーさんがそう言ってくれたから」

舐めたような発言にも、副会長さんは反応せずスタート位置に着きました。

---

「……そんな」

「はあ……うん、やっぱり……最高……」

勝負は、いとも簡単に、あっけなく付きました。

結果は、スズカさんの圧勝。スタートから飛ばしてリードを作り、それを守ってそのままゴール。信じられません。スズカさんが逃げるとここまで強いんでしょうか。先行差しが合っていなかったのは何となく解ります。だけど、それが全くできないウマ娘はレースでは厳しい。だけど、それを捨てて振り切ると、こうなるなんて。

逃げていながらにしてスパートをかけ、最終コーナーからぐんぐんと伸びていく。差しの副会長さんがそれでも追いつけないような早仕掛けと、最終直線でもう一度伸びた。明らかにおかしな伸び方をして、本来のレースであれば大差と判定されるような着差をつけていた。

「……じゃあ、エアグルーヴ。約束通り、トレーナーさんを迎えに行って。きっと解ってくれるから」

「……スズカ。お前は……今まで、こんな力を隠していたのか」

「トレーナーさんが教えてくれたの。私が一番速いから、好きに走れば良いって。それだけで誰にも負けないし、負けさせないって。何人か私に勝てるなんて言うのは、ちょっとむっとしちゃうけど」

それは、あなたじゃない。そうとでも続きそうなところでスズカさんは言葉を切りました。レース中からして、後ろを全く振り向かず。自分だけで走っているかのような、でも、それがおかしいとは思えない感覚。本来のスズカさんは、そう走るのが正解とでも言わんばかりの堂々とした走り方。

「電車で行ける距離のはずだから。私は行ったこと無いけど、そう言ってたし。少し解りにくいらしいから気を付けてね。急いで行って、ちゃんと思い出させてあげてね」

あとは、昏い目をしていなければ。完全なスズカさんが、私の目の前に突然現れた、そんな感じがしました。

---

その日、副会長さんがスズカさんに容易く蹴散らされてから、全てが変わってしまいました。それは私も例外ではありません。

まず、スズカさんが言った住所に、「トレーナーさん」は住んでいませんでした。同じ苗字の方はいましたが、そんな名前の方はいらっしゃらなくて。何とか調べて同姓同名の方も何人か見つけましたが、そのどれも「トレーナーさん」ではなくて。それを伝えた時のスズカさんの荒れようと言ったら、たぶん、あれほど取り乱したスズカさんを……いえ、ウマ娘をこれから見ることは無いでしょう。スズカさんのそれが力に訴えるようなものでなくて良かったと思います。

「……スズカさん」

「……スペちゃん。応援に来てくれたの？　ありがとう」

それから、スズカさんは狂ったようにレースを走り出しました。名前だけを貸しているようなチームに所属して、出られるレースにはぜんぶ出るような無茶を繰り返しました。そして、全てに勝った。スズカさんは、あれから一度も負けずに、オープンレースだろうとGⅠレースだろうと構わず勝って回りました。私も、グラスちゃんも、エルちゃんも、誰も勝てませんでした。宣言通り、マイルと中距離以外には出ませんでしたが、その全てで蹂躙と言っても良い走りを見せつけられました。

「……はい。応援と言って入れてもらいました。でも、応援はしたくないです」
「どうして？　これで三連覇よ。凄いことじゃない？　これならトレーナーさんだってきっと迎えに」
「それです、それですよスズカさん……」

負けたことについては何かを言うつもりもありません。スズカさんの方が速かった、それだけ。スズカさんは何も卑怯なことはしていません。二世代でも三世代でも、後輩の壁として君臨してしまうのはスズカさんが悪いのではなく、勝てない私達が悪いのです。

そんなこと、みんな解っていて。いまやスターウマ娘……いえ、レジェンドウマ娘まで登り詰めたスズカさんは、走ることを望まれている。私達、事情を知る一部のウマ娘以外には。

「もうこんなことやめましょう、スズカさん……！　もう走らなくて良いんです！」
「どうして？　まだトレーナーさんは来てくれてないわ」
「いないんです、スズカさんの言うトレーナーさんはいないんですよッ！　来てくれな

いんです！　これからもずっと！」
「……スペちゃんはトレーナーさんを覚えてないから解らないのね。トレーナーさんは絶対に来てくれるわ」

脚に何重にも巻いたテーピング。過剰なほど積み上がった通院記録。まだ、異常は出ていません。まだ。でも、どのウマ娘だってそんなことはしない、それほどにスズカさんは走っている。

あの時から変わらない光の無い目で、先頭を走り続けている。とびきりのファンサービスを繰り返して、おしゃれやメイクにも気を遣って、満面の笑みでライブをこなしているのに、感情だけが淀んでいる。見ているだけの人達には解らない。ＵＲＡの人達も、スズカさんをこのまま利用するつもりだってエアグルーヴさんが言っていた。トレセン……理事長さんやたづなさんは事情を知って抵抗しているけど、当のスズカさんが走りたいというのだから大したことはできない。

どんなに歪んで見えても、スズカさんはたくさんレースで走って、もっと走りたい、もっと速くなりたい、と言う他のウマ娘と変わらないことをしているのだから。走ることしか考えなくなっても、トレセンはそれを咎めることができない。少なくとも、怪我

をしない限りは。

「トレーナーさんは私のことが大好きなの。速くて可愛い私に惚れて、捕まえてくれたの。だから私がもっと速くなればきっとまた探しに来てくれる。そうだ、もしかしたらトレーナーさんが海外にいるかもってＵＲＡが教えてくれたの。ヨーロッパで走れば見つかるかもって。凱旋門？　っていうレースを走れば、絶対に目につくはずだって。だからね、このレースが終わったら早速」

「いい加減にしてくださいスズカさんッ！」

　見ていられない。見たくない。いもしないトレーナーさんに取りつかれて、何も思わないんですか。もし本当にそんなに大切にしてくれる方がいるのなら、スズカさんがこんなになる前に迎えに来てくれているんじゃないですか。もうやめましょう、スズカさん。

　そんなことを、勢いのままに叫んでしまったはずです。でも、スズカさんは何も言わなくて。最初の頃は、そんなことない、と言い返してくれたのに。

「私がまだ足りないからよ。トレーナーさんは最強無敵のサイレンススズカが好きな

の。絶対に勝ってくれて、トレーナーさんをちょっぴり困らせるサイレンススズカが好きなんだから。まだトレーナーさんに届いてないのよ。もっと走れば届くわ。届けばすぐに来てくれる。ちゃんと教えてあげなきゃ。また惚れてくれなきゃ困っちゃうんだから」

「スズカさん、違います、もう良いんです。トレーナーさんはいないんです。迎えには来てくれないんです。スズカさんはもう十分強いし、日本でスズカさんを知らない人なんていません。海外だってそうです。それでも届かないのは」

「トレーナーさんは別にウマ娘レースが好きな人じゃなかったから。知らない人まで伝えるのにはまだ足りないのね。スペちゃんはどう思う？　もしかしたら、出走回数は減るけど、ドリームリーグに進んだ方が気付いてもらいやすくなるのかなって」

「トレーナーさんが、いないからなんですよッ!!」

スズカさんを遮って、叫んで。それでも、何でもないようにスズカさんは座ったままです。私を怒らせてしまったと、少し申し訳なさそうにするだけで、言い返すこともなく。レースの招集がかかり、行ってくるわね、と部屋を出てしまいました。

「おかしいですよ、スズカさん……」

何も聞いてくれなくなった私の先輩。彼女の信じるものを壊すことはできません。誰が何を言っても変わらない。病院に連れて行っても何も無い。本当に、トレーナーさんを信じている、その一点以外全てただのスズカさんなんです。

その日も、スズカさんは大差で勝ちました。

---

「……スペちゃん？　スペちゃーん」

「え……ん……ごめん、寝ちゃってた」

一緒に来ていたグラスちゃんに起こされました。空港って待ち時間が長いから退屈で眠くなりますね。何か食べようかな。

「もうすぐ搭乗だから食べちゃダメですよ?」
「え、そんな時間?　本当だ……」
「機内食を楽しみましょう。美味しいですよ」

あの日からたくさん時間が経ちました。ウマ娘が現役で走っていられる時間はそう長くありません。私やグラスちゃんも、ドリームリーグからも引退し、ただのウマ娘になりました。ほぼ全てのウマ娘はそういう道を辿ります。グラスちゃんがトレーナーさんと結婚しそうって言うのはびっくりしましたけど、専属ならこういうこともあるのかな。

しかし、スズカさんはまだ走っています。会いに行くために、私達は今からアメリカに飛びます。

ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、香港、ドバイ……世界の芝のレースはスズカさんが全て踏み潰していきました。誰もいないかのように走り、その通りに決着してしまう。世界中を蹂躙して回って。初めは称賛していた人達も、もう何も言っていません。むしろ、ウマ娘レースの暗黒期だなんて言い出して、サイレンススズカを引退させろ、という運動さえ起こっています。そんな声も、スズカさんには届かないのでしょう

けど。

時々日本からも海外遠征をするウマ娘がいます。そのどれも、スズカさんを避けた方が良いと言われて、いや、挑みたいと言って挑んで、大差で負かされて。『サイレンススズカの二着』は既に諺同然に使われるようになってしまいました。実質一着、という不名誉なものですが。

当然、トレーナーさんは追いかけてくることなく。不思議なほど長く、速く走り続けて、いまだ一人で、誰かに言われた「ここならトレーナーさんが見つかるかも」という誘導に踊らされているのでしょう。レースは好きですが、すっかりＵＲＡなんかの偉い人達は嫌いになりました。スズカさんの事情を知ってなお、騙して走らせるようなことをして。

「スペちゃん。顔が怖いですよ」

「……ごめん」

しっかりしなくちゃ。スズカさんを何とか解放してあげたい。このまま脚が折れるまで走り続けるのがスズカさんにとって良いこととは思えない。私のエゴだとしても、

スズカさんには自分を大事にしてほしい。だから、言いに行かなくちゃ。スズカさんに会って、結局一度も勝てなかった先輩に伝えなくちゃ。

この世界にはトレーナーさんはいないんだって、教えなくちゃ。

# サイレンススズカＩＦ４

私が所属するチーム、エルナトのトレーナーは凄い方です。
獲得ＧＩ数？　いえいえ、それだけならもっと……いえ、一人で、という意味なら別ですが、もっと上の方もいらっしゃいます。

では、何が凄いかって。

「お疲れ様です、トレーナー！」
「お疲れ。今日はお休みじゃなかった？」
「レースに勝った時のシューズ、飾りたいって母が言ってまして……この話、昨日しませんでした？」
「ああ。そういえば……そうだったかも」
「しっかりしてくださいよ、もう」

トレーナーの本当に凄いところ。それは、私のようなウマ娘に重賞を勝たせてくれたところです。

謙遜が過ぎるって？　いえいえ。本当に私は、ろくなウマ娘じゃないんです。勝てなかった時期があるものとしてあまり卑屈にはなりたくありませんが、でも、才能の欠片もないとよく言われていたんです。

というより、このチームの子達はみんなそうです。私の他に何人もいますが、みんな、きっと他のチームだったら一度として勝てずに消えていくようなウマ娘だったはずです。

「最近忘れっぽいの。歳をとったのかしらね」

頭を捻りながら、トレーナーが苦笑いを浮かべます。おばあちゃんみたいな言い方に、シューズをしまいながら、私もくすりと笑ってしまいました。

「まだ若いじゃないですか」

「そうでもないのよね……」

このチームで覚醒した……というよりたぶん、元々私達が持っていた適正や能力を見抜いて、それに合うレースとトレーニングを選んでもらって、それで、私達はついに重賞に手が届くまでになりました。

夕方のトレーナー室、いつも通り定時で帰り支度をするトレーナーの後ろに、ズラリと並ぶ額縁。これら全て、私達とその先輩が取ったものです。

「今週末は小倉だけど、行く人は決めてくれた？」

「あ、はい。チャットで聞いたら私と、あとアイスちゃんとスターリーちゃんが行くみたいです。ダブル先輩は行けたら行くって言ってました」

「……」

「……トレーナー？」

「……あ、ええ。ごめんなさいね。ちょっとぼーっとしてて……四人ね、四人。トレセンにバンを出してもらわないと」

先輩の中から、ＧⅡウマ娘も出ています。ＧＩにはまだ足りませんが、ＧⅡだって目玉が飛び出るくらい凄いことです。かく言う私も先々週、三度目のＧⅢに勝つことがで

きました。ハナ差でしたが勝ちは勝ちです。
　そんな私達を率いるだけあって、トレーナーも結構偉い立場みたいです。最近はよくぼーっとしていたり、物忘れがあったり、抜けている方ではありますけど。

　それでも、凄い方なことには間違いありません。時々厳しいトレーニングをしてくれる時もありますけど、それだけじゃなくて、食事や休養、作戦についてもしっかり考えてくれています。

「ああそうだ、先々週のトロフィーが届いたから、持っていくわね」
「あ、はーい。じゃあ書いときますね」

　チームのベッドの枕元、壁に張り付けてある一枚のルーズリーフに書き込んでおきます。私の名前と、トレーナーが持っていくトロフィーの名前。
　エルナトはかなりルールが厳しいです。詳しくは教えてもらっていませんが、大体、逃げ先行の子が多いですかね。それと、ダートの子は一人しかいませんし、その子は芝も走れます。
　その他にも、スカウトでしか入れなかったり、トレーニングに弱音を吐いたりサボっ

たりするとかなり早い段階から仮加入状態に戻されてしまいます。普段は優しいし、結果が出せなくても怪我をしても絶対に追放はされないんですけどね。

そしてもう一つ、今私が書き込んだメモ書きにずらりと並ぶトロフィーの名前。エルナトが発足してから数年後から勝ち取ったトロフィーの全てです。

エルナトにいるためのもう一つの条件。それは、もしトロフィーが貰えるレースで勝てたら……つまりオープンレースより上のグレードで勝てたなら、そのトロフィーをトレーナーが預かる、というものです。

当たり前ですが、レース当日に写真撮影をするために貰えるトロフィーはそのまま貰えるわけではありません。レプリカ……というと言葉が悪いですが、少し小さめにして、台座に名前を彫ったものが貰えます。

そして、それが郵送なり、理事長さんを通して届くわけですが、そのトロフィーを、トレーナーがどこかに持っていっても何も言わない、というのが条件です。

「……あ。バイオレットちゃんが明日必ずトロフィーを持ってくるって言ってました。結構マジな顔してたのでちゃんと持ってくると思います」

「そう？　良かった。明日忘れたら仮加入にしようかと思ってたの」

……怖くて震えました。このトロフィーのことに関しても、トレーナーはかなり真剣になります。何か並々ならぬこだわりでもあるんでしょうか。持っていったトロフィーがどこにあるのかは私達には知らされません。だけど、誰から何のトロフィーを預かったかは全て記録され、『いつか返す』と言われています。

「あはは……バイオレットちゃんも悪気はないんですよ。忘れっぽいだけで」

「ううん。これはダメ。必ず持ってくるように言っておいてね。本当は持って帰らないでほしいのよ。すぐに私が持っていきたいんだから」

「……キツく言っときますんで……」

ただまあ、それくらい勝てないことに比べれば何てことはありません。それに、勝ったことはちゃんと記録に残りますし、賞状も賞金も貰えます。最悪トロフィーが帰ってこなくても誰も文句は言わないでしょう。

こんな良い条件のチームもありません。やっぱりウマ娘の気持ちをよく理解しています。バイオレットちゃん、明日は絶対に忘れないように言っておかないと。

「じゃあ気を付けて帰るのよ。もう鍵を閉めるから」
「あ、はい。お疲れさまでした」
「お疲れさま」

優しい微笑みで見送られ、トレーナー室を後にします。トロフィーの行方、たまに知りたいとも思うんですけど、何かとタイミングが無いんですよね。聞いても適当に誤魔化してくるので、触れちゃいけないものじゃないはずなんですけど。聞かれたくないなら一睨みすれば良いわけですから。

ただまあ、最近はやけに機嫌が良いみたいですし、多少無茶をしても大丈夫かなあ、なんて思ったりして。

廊下を歩いていると、着信がありました。友達のアイスちゃんです。

「もしもし？　アイスちゃん？」
『あっもしもし？　今どこ？』
「え……今トレセンだけど……」
『今さぁ、アタシもトレセンいんだけどさぁ』
「うん」

下駄箱で靴を履き替え、外に出ます。アイスちゃんのことだし、たぶん大した用じゃないんでしょうね。ただ声が聞きたいとか、絡みたいとかで連絡してくる子ですから。

『前話した、トレーナーがトロフィーをどこに持ってくのかってやつ、今日探らない？』

「え……どしたの急に」

「いやさあ」

歩いていると、前の方からアイスちゃん。通話を切ります。確かに以前から、それはちょっとやってみたいと思ってました。探るなとは言われてませんし、その、良くないことだとは知っていますが、それでも知りたくなるのが人の常です。

「今日、トレーナーの車無くてさ。でも、今日トロフィー届いてたじゃん」

「私のね」

「は？　ハナ差で負けたアタシを煽ってんの？　キレそう……まあ良いや。じゃあトレーナー、今日は歩いて持って帰るんじゃない？　それなら追えるっしょ」

「……なるほど」

確かにそうかも。流石に車を追うと気付かれてしまいますし、こちらも疲れてしまいます。それに、走りすぎて疲れてしまうと明日のトレーニングに響きます。

歩くなり走るなりであれば、距離さえ取っていれば簡単に追えるはずです。いや、本気で逃げられたら危ないかもしれませんが。

「アタシは行くけど、アンタ行く？」

「……行く」

「よしきた」

こうして、私達はトレーナーを尾行することにしたのです。

……それで、どんなことになるのかを考えることなく。

# Bad√4 『あなたをおって』

「……どこに行くんだろうね」
「……さあ？」

どうやらスーツを着替えたらしいトレーナーは、トロフィーの入ったケースを大事そうに抱えながら日の暮れた道を歩いていました。私達もかなり後ろの方からそれを追います。髪の毛でまだマシですが、かなり濃い黒のスーツはとても見辛いです。

「毎回ヒントすらくれないもんね」
「着替えてるし、たぶん人に会いに行くんじゃない？」
「恋人とかかな」
「でも指輪してないよ」
「大事にしてたらあえて外すことだってあるでしょ。何も知らないのね。だからＧⅢ勝ったのにモテないのよ」
「それは今関係無くない？」

あんまり大声を出すと気付かれちゃうかもしれないんだから騒がさせないでほしい。

そもそもアイスちゃんだって別に彼氏いないじゃん。
それを言うと青筋を立てて怒り出したので、そこから数分間私達は睨み合いながら尾行を続けることに。いつレースが始まってもおかしくない一触即発の状態は続き、お互い幸せにならないと気付いたところで、どうやらトレーナーがどこに向かっているのか大体解ってきました。

「……病院？」
「病院だよね、この道だと」

トレセン付近でもかなり大きい病院の方に向かっていました。私達はそうそう怪我なんてしないのであまりお世話にはなっていませんが、それにしても……そもそも何故トロフィーを？　あるいは、ただ寄っただけでしょうか。

「……あ、入った」
「隠れるところ多いし、こっからはもう少し近付こうか」

受付の方に何か話して、エレベーターの方へ。流石に乗り込むわけにはいかないの

で、二人で連携して階段で追い付きます。入院棟の最上階。ここには確か、個人病室しか無いはずです。トレセンの生徒であればよほどでなければ相部屋なので、違うのでしょうか。

……それにしても。

「……ねえ」

「うん……物凄く不気味……どういう場所よ、ここ」

「いや、うーん……たぶん個室だしお高めってことは解るけど……難病とか……？」

「……ちょっと、なんかアレよね、やっぱり尾行って良くないことかもしれないわよね」

「……私もそう思ってた」

一応追いかけて進みますが、正直後悔しています。こんな闇の深そうなことになるなんて思ってもみませんでした。トレーナーはいつも……テンションが高いわけではなくとも元気な方ですし、優しく笑う方ですから。

「……どうする？　帰る？」

「……ギリギリ賛成」

「よし……じゃあ……あっ入った。あの病室だ」

もうやめよう。これ以上は何か嫌な予感がする。二人の意見がそこで一致して立ち止まった瞬間、トレーナーがとある病室に入っていきました。滑り込むように素早く、しかし周りを見回すこともなく。

しかし私達は帰ると決めたのです。決して中で何が行われてるか、盗み聞きなどしません。

ぴと。

「……アイスちゃん、重い。胸が乗ってるんだけど。また太ったでしょ」
「聞こえないでしょ。喋らないで」
「でぶ」
「チッ……明日の併走覚えておきなさいよ」

ああ、良くないことだと解っていても、ウマ娘は好奇心には勝てないのです。耳をくっつけて、中の会話を聞き取ろうと精神を研ぎ澄ませます。会話が聞こえるまで少し

のタイムラグがあって、話し始めたのか声が聞こえてきて。

「……っ!?」

「な――」

何か聞こえると同時に、私達は後ろから何かに引っ張られて、口を塞がれて。叫ぶ間も無くそのままどこかへ引きずられていったのです。

――――――

「手荒なことをしました。申し訳ありません」

次に目が開いた時、私は病院の二階、レストランに連れて来られていました。私達二

人を解放して、犯人はそう言いました。

「ぶ、ブルボン先輩!?」

「静かに。注目を集めます」

「す、すみません……」

そこにいたのはエルナトのＯＧ……といっても一度も来たことはないんですが、ＯＧのミホノブルボン先輩です。もうかなり前のことですがら、とっくに引退して普通のウマ娘として何かされているとは聞いていましたけど。

「な、なんでブルボン先輩がここに……」

「……いえ、お互いにその質問はやめましょう。お二人が何故ここにいるのか、私は理解しています。いつかこうして強引に事情を知ろうとする方が出てくるだろうとは予想していました」

「……はあ」

どうも、会話の主導権は私達には無いようです。当たり前ではありますけど。ブルボ

ン先輩はいくつか飲み物を注文すると、一枚の写真を取り出しました。

「指示は受けていませんが、これで変化がある可能性はあります。お二人が知りたかったことは私が話しましょう。そして何を思うかはお二人次第です」

「……これは？」

「写真です。あの病室にはこの方が眠っています。もう八年になります」

写真には、三人が写っていました。二人のウマ娘と、一人の人間の女の人。そして、うち一人は私達にとっても見覚えがありますし、うち一人はまさに目の前にいるブルボン先輩です。

「これは、私達がチーム・エルナトとして活動していた頃の写真です。これが私、ミホノブルボンです」

一人ずつ指差して、ブルボン先輩は無表情に会話を進めます。どうやら私達は、余計なことを言わない方が良さそうです。事情を全て、ブルボン先輩は知っているのでしょう。

「そして、この方があの病室に眠っている方」

なにせ、過去のチーム・エルナトのメンバーを知っている方です。中央を指した指が、そのまますぐ横にずれます。抱き合うくらいの距離感で控えめに笑う姿は、私の知る彼女とは違いました。

「この方が、あなた方がトレーナーと呼ぶ方……サイレンススズカさんです」

今もトレーナーはよく笑います。でも、控えめでもこんなに楽しそうにはしません。写真の中のトレーナーは、サイレンススズカさんは、病室にいるらしい彼女に寄り添って、光ってすら見えました。

エルナトのトレーナー。私達の恩人たるトレーナーの、現役時代。そして、私達が知っているものとは違う名前。サイレンススズカと言われれば誰だって解ります。エルナトの最初期のメンバーであり、神話を作ったウマ娘。

誰にも捕まることのない大逃げを武器に、エルナトに入ってからはついぞ一度も負け

なかった伝説の逃げウマ娘です。

「これって……じゃあ、この人が、エルナトの元々の……？」
「はい。お二人がどう聞いているかは解りませんが、この方です」
「え、で、でも、確か前のトレーナーさんは普通に退職したって、理事長やたづなさんだってそう言って」
「はい。ですのでこれは、ＵＲＡやトレセン学園にも話の通った事柄だとご理解ください。故に、積極的にこの話を広めることはお勧めしません。矛盾するようですが……私も、これを知る者は少ない方が良いと考えています」

淡々と語るブルボン先輩。じっとこちらを大きな目で見つめます。ブルボン先輩が指差した、写真の中の、人間の女性。この人が、トレーナーを覚醒させたという、エルナトの初代トレーナー。サイレンススズカの担当の方。

「もう一度聞きますけど……この人が、トレーナー……サイレンススズカさんのトレーナーですか？」
「はい。私達のトレーナーです」

「この人が、あの病室に？　八年も？」
「はい」

八年、入院し続けている？　難病？　ううん、ただの難病なら、普通の病気なら、きっとこの話をもっと多くの人が聞いているはず。チーム・エルナトはそういうチームだから。ブルボン先輩だってレジェンドの一人です。こうして話せることが奇跡に思えるくらいの。

「ど、どうして……？」
「原因は、まだ解っていません」
「え……」

写真をしまい、ブルボン先輩は届いた飲み物を回してくれます。しかし、口をつける気にはなりません。口の中はカラカラですが、しかし、ブルボン先輩の言葉を止めてはいけないと、頭の中の何かが騒いでいます。アイスちゃんもまた、普段からは考えられないほど静かに聞いています。

「ある日、突如としてマス……彼女は意識不明の昏睡状態に陥りました。いえ、正確にいえば前兆はあったのでしょう。物忘れが激しくなり、何も考えていない時間が増えていました。脳に何かしらの問題が発生していたのでしょう」

「病院に運ばれましたが、何度検査をしても、何も解らないという結論に達しました。数いる名医の方々でも、原因は不明だと。外傷及び腫瘍等も見付からず、身体は健康そのもの。しかし、脳波のみが異常に弱くなっている状態だそうです」

「当然、医者たる彼らに治せないものは我々にも治せません。しかし、彼女は生きています。今も確かに生きているのです。意識も感覚も存在していないようですが」

「スズカさんは酷く悲しみました。トレーナールームから出なくなり、そのまま死んでしまうのではないかというほど食も細くなりました。しかし、ある日の見舞いを機に、突然元に戻りました。もう大丈夫だと、そうおっしゃった」

「私達も知らない合間にトレーナーライセンスを取得して、突然トレーナー業を始めました。あとはお二人も知っての通りです」

「……じゃあ、私達のトロフィーって」

ブルボン先輩がいちごジュースに口をつけたのを見て、一段落ついたのだとアイスちゃんが聞きました。ブルボン先輩は、さらりと、そうです、と首を振り、飲まないのですか？　と促してきた。

「我々のトレーナーへの捧げ物です。スズカさんは恐らく……いえ、間違いなく、トレーナーに追従しています」

……自分のトレーナーが倒れ、代わりに自分がチームを引き継いでいる。そこだけ聞けば何もおかしなところはありません。だけど何でしょう、胸の辺りがもやもやするような、何か違うと叫びたくなるような違和感があります。

横目に見たアイスちゃんも同じように感じているのか、飲み物に手をつけようとはしません。

「……それを、ずっとやっているんですか」

「やっています。間違いなくこれからも継続するでしょう」
「ブルボン先輩は、今何を？」
「……スズカさんを見届けることが私の責務であると思っています。中で何が行われていて、どのような会話……いえ、会話が行われているかには関知しません」
「……いや、でも、その……」

何だろう、私は何が言いたいんだろう。全く纏まりません。でも、言い様のない気持ち悪さだけがあります。おかしいですよ、とアイスちゃんが独り言のように溢しました。

「いやその、何も間違っていないのは解るんです。トレーナーは何も間違っていない、はずです。全部、いや、たぶん、トレーナーじゃなければ、綺麗な話で終わるような……」
「……言いたいことは理解できます。ですが私は、個人の感想ですが、スズカさんは間違っていると感じます」
「え……」
「最近、スズカさんはとても機嫌が良いようですね」

そ……うだ。機嫌が良い。とても。

「……待ってください。もしかして」

私が何かに気付く前に、アイスちゃんが声を震わせた。

「恐らくは」

対して、ブルボン先輩もゆっくりと首を傾げました。私達より遥かに大人なブルボン先輩が、とても小さく見えます。

「追従している、と申し上げた通りです」

それを聞いた瞬間、私は思い切り立ち上がってテーブルを殴り付けてしまいました。

「は!? い、意味が解りません! なんですか、それは!」

「私にも解りません。ですが、スズカさんは確かにトレーナーの何かを受け継いだよう

です」
「受け継いだって……」
「さっきの、ある日を境にって……」
「トレーナーは、ウマ娘の才能を見抜くことに長けた方でした。スズカさんも同様の能力を得ていると考えられます」

なにか、スケールが大きくなってきました。ウマ娘の才能が解る能力なんて、訳の解らないことを言われても困ります。でも、一度話しただけでも、ブルボン先輩はそんな冗談を言うような人には見えませんでした。
でも、それがもし本当だとして、だったら。

「……トレーナーを止めないと！」
「……何故ですか」
「何故って……！」

こんなことは間違っていると言わなければなりません。まだ、綺麗な言葉にはできないけど、それでも、トレーナーがこれを続けることが良いことのようには思えないので

す。

「間違ってるでしょ、こんなこと……！」
「ちょっと！　失礼じゃん！　すみません、ブルボン先輩」
「……いえ」

　とっさに駆け出そうとしてしまった私の手を、アイスちゃんが掴んで止めてくれます。でも、だけど。確かに今この場で失礼なのは私だけど、全部の話を聞く限りでは、むしろ、こんなものを止めようとしない、

「間違っているかいないかで言えば、間違っていると思います」

　ブルボン先輩の、方なんじゃないか、って。

「スズカさんの思考が正しいとは思っていません。恐らく、間違っています」
「じゃあ！」
「……ですが、申し訳ありません。私は、スズカさんを止められません。お二人が止めよ

うとするのも、私は阻止します」
「……どうして」

何も言えなくなって座り直します。ブルボン先輩は変わらず無表情のまま、グラスの中身を全て飲み干しました。

「何故なら、トレーナーの意志を継いだのは、スズカさんだからです」
「……は？」
「私では、なかったからです」

汗をかいたグラスを両手で握り、ブルボン先輩は少し俯きました。店内ＢＧＭが一瞬消えた時、椅子が軋む音がします。

「トレーナーの一番のウマ娘はスズカさんです。トレーナーがもう話せない以上、それを代弁すべきはスズカさんです」
「いや、そうじゃなくて……」
「そうなのです」

今までで一番はっきりと、ブルボン先輩は言葉を切りました。

「私ではなく、スズカさんが継いだのですから、私には咎める権限などありません。トレーナーの力をどう使おうと、私に止めるべくもありません」

「ブルボン先輩……」

「せめて。せめて半分だけでも。ほんの少しだけでも私が継ぐことができたなら、私も何か解ったのかもしれません。ですがそうはならなかった。全て、スズカさんが持っていってしまった」

表情が無いながら、それでも、ブルボン先輩はどこか泣き出しそうにも見えました。

「でも、理由とか権限とかじゃなくて、単純にブルボン先輩がそうしたいからって言えばっ！」

「言えません……止めるのが正しいことだと解っています。これ以上スズカさんをウマ娘に関わらせるべきではないと解っています。ですが、止められません。止められないんです」

だんだんと、言葉が速く、つっかえつっかえになっていきます。

「もしかしたら、トレーナーの能力を排除する方法があるかもしれません。ウマ娘に関わらなければ、これ以上悪くはならないかもしれません。ですが、ですが、スズカさんに、マスターのそれを捨てろと、もはや動くことも話すこともできないマスターの、最後の意志かもしれないそれを、捨てろなどと言えるはずがありません」

「ただ一つで良かったのです。一言でも、マスターが何か遺してくれていれば。私も欲しかった。スズカさんと同じになれたら、こんなことはやめましょうと言えたのに。でも言えないんです。何も持っていない私が、一つだけ持っているスズカさんに、どうして言えるでしょう」

ブルボン先輩が、泣いています。

「解らないのです。今でもまだ解らない。どうすれば良いのでしょうか。スズカさんにとって最も良いことは何なのでしょうか。解らないんです。マスターが何も言ってく

れなかったから。私一人では、何もできないんです。ただこうして、スズカさんを見ていることしかできない」

「ブルボン……先輩……」

「だって、マスターはもう起きてくださらないのです。マスターは今も緩やかに死んでいます。スズカさんが病院からの要請にサインをすれば。治療費の支払いが一秒でも遅れれば、それでマスターは死んでしまうのです。全て、スズカさんに決定権があるんです。私が、私に、スズカさんに、マスターを、殺せと、そんなこと、は」

ぼろぼろと涙を流し、握るグラスにヒビが入ります。

「でも」

「申し訳ありません。私には、私にはできません。思考が上手くいかないんです。どうすればいいですか。私は何をするべきですか。スズカさんに何を言えばいいんですか。何と言えば、私はこんな、気持ちで」

ぱきん、とグラスが割れました。すぐに破片が刺さり、少しだけ血が垂れます。はっとなって、ブルボン先輩は濡れた手のまま財布を取り出し、一番高いお札を寄越しまし

た。

「すみません、こんなことを話して、あなた方を困惑させました。ですが、解りません、話さなければと、話したいと、こんなことでは何も変わらないと解っているのに、変えようとしたあなた方も私は止めてしまうのに。でも、しかし、ああ、申し訳ありません、もう私は行きます。何もできないのですから、せめて、せめてスズカさんを見ていないと、私が、お二人を見届けないと、スズカさんが倒れても、私が側にいられるように、私、も」

不自然に言葉が途切れ、そのままふらついて、ブルボン先輩は席を立ちました。ゆっくりと歩いていくブルボン先輩を見て、私はつい、良くない言葉が口をつきそうになって、慌ててグラスを口に運びます。

「……バカみたい」

「……アイスちゃん！」

ですが、その言葉を私の友達が代わりに吐き出しました。ブルボン先輩は聞こえてい

るのかいないのか、そのまま立ち去っていきます。無意識に手を繋いでいた私達は、それを放すこともなくただ下を向いていました。

「……帰る」

「い、言わないの？　このこと」

「……言えるわけないでしょ。言ってどうするの。明日から放り出されたら、アタシらどうやって過ごすのよ」

「それは……そうだけど……」

「どんな裏話があっても黙ってよう。何も、聞かなかったことにする」

目を鋭くして何度か繰り返した彼女に、私も何も言えませんでした。自分のことと、トレーナーのこと。自分が大切なのは、当然だと思っていました。これからもきっとそうです。

「……アタシらには関係無いことだし」

「……そう、だね」

それも、生き死にが関わってしまったらなおさらなのです。

「トレーナーさん」

「今日もトロフィーを持ってきましたよ」

「トレーナーさん」

「みんな、とっても速いんですよ。きっと次も勝ってくれるはずです。来年は、ＧＩに手が届きそうな子もいて」

「トレーナーさん」

「もう、私より速いんですよ、あの子達」

「もう私、一番速くなくなっちゃいましたよ。トレーナーさんが見ていてくれないからです」

「ねえ、トレーナーさん」

「嫌ですよ、私、こんなの嫌です。トレーナーさん。私が一番速いって、言って、くれてたのに」

「でも、私の方が遅いって。そう書いてあるんです。私、もうあの時みたいに走れないんです」

「トレーナーさん……トレーナーさんも、嫌ですよね？　悔しいですよね？」

「トレーナーさん」

「もう私、あの時のトレーナーさんより、歳上になっちゃったんですよ」

「もうあんな風には、走れないんです。トレーナーさんに、私のことを見せてあげられない」

「トレーナー、さん」

「教えてください、トレーナーさん。私、どうしたらもっと速くなれますか？」

「どうしたら、もう一回あの景色が見られますか」

「トレーナー、さん……」

「……寂しいですよぉ」

「トレーナーさぁん……」

「私……私……もうトレーナーさんのサイレンススズカじゃなくなっちゃいますよ」

「速くないんです。私、速くない……」

「私、どんなに休んでも、５％、怪我しちゃうんです……もう、トレーナーさんが知って

る走り、できないんです……」

「でも……いつも、走ってしまうんです。トレーナーさんが、止めて、くれないからですよ……」

「起きて……起きて、トレーナーさん……」

「また、また私に……私に、走っちゃダメって言ってください……」

「スズカが一番速いって、誰にも負けないって言ってください……一度で良いです……から……」

「好きって言ってください……私、頑張りますから……もう一回、誰にも負けない、私になりますから……」

「トレーナーさんが教えてくれないと……わからないです……どうしたら良いのか……また、教えてください……」

「早くしないと……もう……見られなくなっちゃいますよ……」

「トレーナーさん……」

「私、お料理もできるようになったんです……なんでも一人で……できるんです……」

「トレーナーさんが来ても良いように……ちゃんとお世話、できるようになったんです……」

「美味しいん、ですから……たくさん食べれば、きっとまた、太っちゃいますよ……」

「そしたら……また、撫でてください……抱き締めてください……トレーナーさん……」

「トレーナー、さぁん……」

「わがまま……また……言わせて……」

「さびしい……よぉ……」

「トレーナーさんのご飯が食べたい……一緒にお風呂に入りたい……」

「トレーナーさん、と……」

「お話……したい……少しで良いから……」

「起きてくれたら……起きてくれたら、それで良いんです……」

「この目も返します……できないことは私がやります……」

「私が嫌なら……一回だけ、一回だけ撫でてくれたら……それで我慢しますから……」

「起きて、起きてくださいトレーナーさん……」

「スズカって……スズカって言ってください……」

「置いていかないで……私が……嫌いでも良いから……」

「少しだけでも……一言でも良いから……」

「どうしてほしいか……教えてください……どうすれば良いのか……教えて……」

「叱って……」